1. ボランティアセンター「学生コーディネーター」

実施目的	(1) 学生がボランティアセンターの運営や事業に参画することを通して、学生のニーズを反映させることで学内外における社会連携教育課事業の一層の活性化を図ること。 (2) 継続的な取組にすることで、学生に対し、ボランティア活動やボランティアコーディネーションにおける実践的かつ深い学びを提供すること。
募集期間	2022年６月22日（水）～７月13日（水）12：00
活動期間	2022年８月～2023年３月31日（金）
定　　員	10名程度
選　　考	活動に関する双方のイメージのズレがないことを確認するため、エントリーシートをもとに「オンライン面接」を実施し、最終的な採用者を決定した。
採用学生	(1)　大久保　菜優（文学部 文学科　２年） (2)　葛　慶慶　　（文学部 史学科　４年） (3)　北村　香乃　（経済学部 経済学科　２年） (4)　国沢　夏実　（社会学部 現代文化学科　２年） (5)　児島　渚佐　（経済学部 会計ファイナンス学科　３年） (6)　佐藤　愛夢　（社会学部 現代文化学科　３年） (7)　中村　文香　（コミュニティ福祉学部 福祉学科　２年） (8)　坂内　奏太　（社会学部 社会学科　２年） (9)　藤橋　唯　　（法学部 政治学科　３年） (10)　松戸　徳寿　（現代心理学部 心理学科　１年）

① 学生コーディネーターの主な活動

A) ボランティアセンター主催の取組への参画

センター主催の普及・啓発のための取組（例：Welcome Week、ボラカフェ 等）の企画・運営に携わる。

B) 上記以外のボランティア活動の啓発にかかわる学生コーディネーター企画の立案・実施

同じ学生の立場から、ボランティアを身近に感じ、参加につながるきっかけとなるような取組を企画・提案・実施する。

C) ボランティア活動に関心のある学生やボランティア活動に取り組んでいる学生の支援

ボランティア活動希望の相談者へのアドバイスや学内のボランティア活動団体のネットワーク運営のサポートなどを行う。

D) ボランティアコーディネーション力の向上

上記に取り組む上で、多様なニーズに応えられるようにスキルアップに取り組む。

E) 定期的なミーティング（授業実施期間は、週1回）

各取組に向けた準備や企画の構想をまとめるための議論をし、より良い実践につなげる。

② キックオフミーティング（オリエンテーション）

実施日時	１回目：2022年９月13日（火）10：00～12：00 ２回目：2022年９月16日（金）13：00～15：00 ３回目：2022年９月19日（月・祝）12：00～14：00
場　　所	いずれもオンライン（Zoomミーティング）

実施目的	(1) ボランティアセンターの運営や事業に参画するうえで必要となる基礎的な知識を提供することで、立教大学やボランティアセンターの方針、実態への理解を深めること。 (2) ボランティア活動やボランティアコーディネーションの基本的な考え方を確認したうえで、学生コーディネーターとして取り組みたいこと・取り組むべきことのイメージを共有すること。 (3) メンバー一人ひとりの想いやアイデアを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属感を高めること（チームビルディング）。
参 加 者	１回目：学生コーディネーター５名、ボランティアコーディネーター２名 ２回目：学生コーディネーター４名、ボランティアコーディネーター２名 ３回目：学生コーディネーター１名、ボランティアコーディネーター２名
主な内容	(1) 自己紹介 (2) オリエンテーション ①ボランティアセンターの取組み（広瀬） ②ボランティア活動とボランティアコーディネーションの考え方（齋藤） (3) 活動に関する具体的な動きの共有 (4) 学生コーディネーターとして目指すことの共有（使用ツール：Google Jamboard） →共有されたアイデアをもとに、活動の軸になるミッションとしてまとめていく。

③ 学生コーディネーター任命式

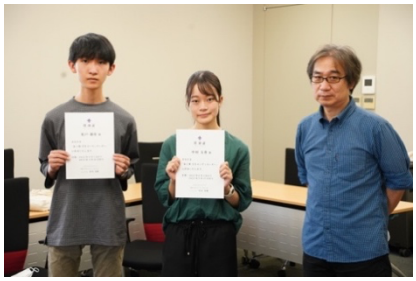
実施日時	2022年９月27日（火）12：40～13：15
場　　所	池袋：チャペル／新座：7号館2階会議室 ※オンライン（Zoomミーティング）で同時中継
内　　容	(1)「礼　拝」 「奨　励」 中川　英樹（ボランティアセンター長／大学チャプレン） 「任命式授与」 池袋：中川　英樹（ボランティアセンター長／大学チャプレン） 新座：結城　俊哉（ボランティアセンター 副センター長／コミュニティ福祉学部 教授） (2)「学生コーディネーターより抱負」 (3)「挨　拶」 結城　俊哉（ボランティアセンター 副センター長／コミュニティ福祉学部 教授）
参 加 者	学生コーディネーター：10名／ボランティアセンター教職員：７名

池袋キャンパスのチャペルと新座キャンパスの会議室をオンラインでつなぎ、2022年度学生コーディネーターの任命式を執り行った。

礼拝では、ボランティアセンター長の中川チャプレンによる奨励の後、学生コーディネーター10名に対して、池袋では中川チャプレンから、新座では副センター長である結城先生から、任命証が直接手渡された。

▲中川チャプレンによる礼拝（池袋）

▲集合写真（池袋）


▲集合写真（新座）

④ 学生コーディネーター「MISSION2022」の策定

学生コーディネーターの活動を始動させるにあたり、まずは本学におけるボランティア支援やボランティアセンターの在り方・その取組みについて、それぞれが考える魅力や価値、課題や改善点を共有した。学生コーディネーターに応募しようと考えたきっかけや自分が実際にボランティアセンターを利用したり、支援を受けたりした経験の中で感じたことなど、学生一人ひとりから様々な考えが共有されたことで、これまで教職員が認識できなかったような課題も浮き彫りになった。その後、それらを分類し、キーワードを抽出しながら「自分たちに求められていること、これから目指すもの」についての認識をすり合わせた。言葉の細かい違いについても議論を重ね、どのような言葉を用いれば自分たちの想いを表現できるのか、解釈のズレが起きないかなど試行錯誤しながら文章を紡いだ。

最終的に、学生コーディネーター10名がまとめた文章が「MISSION2022」である。このMISSIONは、立教大学ボランティアセンターの「ミッション・ステートメント」に対して、学生コーディネーターの立場から取り組むための指針として位置づけており、今後はこの指針に基づいて活動し、学生のニーズに寄り添った「学生コーディネーター企画」を生み出していく。

立教大学ボランティアセンター～ミッション・ステートメント～
立教大学ボランティアセンターは『共に生きる』を礎に、学生が他者との関わりや社会的な課題に取り組むことを通して、人間としての成長とよりよき社会の実現を目指す意志の育成を図ります。

↑

学生コーディネーター「MISSION2022」
1. ボランティアセンターの活動の見える化 現状としてボランティアセンターの中身（取組や人、情報など）が見えにくい状況にあり、学生がアクセスしにくいということが大きな課題となっているため、ボランティアセンターの活動やそこに関わる人などを広く知ってもらうことで、安心してボランティアセンターに来室できるようにしていく。 2. ボランティアの魅力の再発見・発信 「ボランティア」という言葉の硬さ・分かりにくさ・特別感などが学生の中にあり、活動に参加するうえでのハードルが高くなっているため、一部の価値観に偏ることがないように、学生コーディネーター自身が「ボランティア」に対する考えを深めたり、その魅力を再発見したりしながら、それらを多くの学生に伝えていく。 3. 人と人とを繋げるきっかけをつくる ボランティア活動への一歩を踏み出しやすいような環境づくりに取り組むことで、学生が学内外に限らずコミュニティを広げ、多様な人とつながっていけるようなきっかけをつくっていく。

⑤ 学生コーディネーター企画「十文字学園女子大学ボランティアセンターの見学」

実施日時	2022年12月５日（月）10：40～12：00
場　　所	十文字学園女子大学ボランティアセンター
実施目的	(1) 他大学のボランティアセンターを視察することで、立教大学ボランティアセンターの課題発見を通し、問題解決や質の向上を図ること。 (2) 他大学の学生コーディネーター（スタッフ）と交流することにより、新たな企画のヒントを得て企画の立案につなげること。
MISSIONとの対応	１．ボランティアセンターの活動の見える化 ２．ボランティアの魅力の再発見・発信
主な内容	以下の項目について、実際にその環境を見たり、話を聞いたりして学ぶ ・ センターを身近に感じてもらうための環境づくり（オフィスデザイン） ・ センターの活動を広めるための広報活動 ・ ボランティアに参加する敷居を低くし、学生に気軽に参加してもらうための企画づくり ・ 地域との連携
参 加 者	学生コーディネーター：３名／ボランティアコーディネーター：１名

■ 学生コーディネーターの記録から

立教大学ボランティアセンターをより多くの学生が利用しやすい環境にするためのヒントを得るため、十文字学園女子大学ボランティアセンター（以下、十文字ボラセン）を訪問し、施設を見学させていただいたり、活動についてお聞きしたりした。今回対応してくださったのは、ボランティアコーディネーターの西村百絵さんと学生スタッフ１名で、途中からセンター長の佐藤陽先生にもお越しいただき、センターの取組みについてご説明いただいた。

十文字ボラセンは、ボランティアをしたい学生が様々なボランティア活動に出会える場所になっており、そこでボランティアの魅力や楽しさを学内外へ発信するために活動している有志の団体が「学生スタッフ」である。主に、「広報活動」「ちょこボラ」「ボラセントーク」「研修」「スタッフ間交流」を軸に活動していると話していた。

互いの取組みについて情報交換した中で両大学に共通する課題として挙がったのは、「学生スタッフや学生コーディネーターが集まって話す時間がとりにくいということ」だった。学部や学年が違えば時間割が異なるため、ミーティングの日程調整をしても結局全員が出席できる日はなく、空いている人だけで話し合わざるを得なくなってしまう。そのような中で学生同士のすれ違いを軽減させるために、十文字ボラセンでは、実際にボラセンを訪れた学生同士がノートでやり取りするという「交換ノート」のシステムを取り入れたとのこと。活動している中で生まれた課題を解決するための工夫についてもお聞きし、とても参考になった。

今回の訪問で得た新しい活動を参考に、立教大学のボランティアセンターをもっと盛り上げていけるように取り組んでいきたい。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲十文字学園女子大学ボラセンの外観

▲情報交換の様子

▲集合写真

⑥ 学生コーディネーター企画「学生コーディネーター交流会」

実施日時	2022年12月20日（火）18：00～19：30
場　　所	池袋キャンパス ボランティアセンター
実施目的	学生コーディネーターの親睦を深め、今後の活動をより良くすること。
主な内容	下記のプログラムを通して交流を深めた。 「自己紹介ゲーム（名刺カードを使った神経衰弱）」「ボッチャ」「ビンゴ」
参 加 者	学生コーディネーター：７名／ボランティアセンタースタッフ：３名

■ 学生コーディネーターの記録から

９月に活動を開始してから毎週のようにオンラインでミーティングを行ってきたが、キャンパスが分かれていることもあって全員が顔を合わせることは難しく、コミュニケーションに難しさを感じていたため、ボランティアセンターのスタッフを含めた交流会を初めて開催することにした。

最初の自己紹介は、トランプゲームの神経衰弱のようなゲーム形式で行った。学生が作成したオリジナルカードを使用することで、互いの好きなものや長所・短所など、オンラインミーティングだけでは伝わっていなかったメンバー一人ひとりの人柄などを知ることができた。さらに、パラリンピック競技の一つでもあるスポーツ「ボッチャ」を簡易的なルールで実施した。ボッチャ未経験者が大半であったが、しょうがいの有無に関わらずだれでもできるスポーツだからこその魅力を味わいながら、白熱した試合が繰り広げられた。

最後は、スマホアプリを使用してビンゴゲームを実施。一番目にビンゴを達成したメンバーには景品として立教タオルが贈られた。

当日は、顔を合わせて直接話すことができる喜びを感じた。今後のミーティングの多くはオンラインでの実施になるが、このような交流会の場をつくることで、メンバー間の円滑なコミュニケーションを促していきたい。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲自己紹介ゲーム

▲簡易版ボッチャ

▲集合写真

⑦ 学生コーディネーター企画「ボラカフェ～海外・国内ワークキャンプって何するの？～」

実施日時	2023年１月10日（火）17：10～18：10
場　　所	池袋キャンパス ボランティアセンター
実施目的	(1) 実際にボランティア活動に参加した人との交流を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらい、参加へのハードルを下げること。 (2) 春休みのボランティア参加を考えている学生に対し、きっかけとなる場を提供することで、その学生がボランティア活動を始めたり、受入団体とつながったりすることができるようになること。
MISSION との対応	１．ボランティアセンターの活動の見える化 ３．人と人とを繋げるきっかけをつくる
内　　容	「NPO 法人 good!」のスタッフやワークキャンプの参加経験者をお招きし、「ワークキャンプとは何か」や、「実際にどのような活動をするのか」を直接お聞きする。
ゲ ス ト	・ 正田　理沙子さん（NPO法人good! スタッフ） ・ 金井　麻那さん　（立教大学 社会学部 ２年／good！国内ワークキャンプ参加経験者） ・ 増田　亜美さん　（武蔵大学 ４年／good！海外ワークキャンプ参加経験者）
参 加 者	一般参加：３名（申込：３名） 学生コーディネーター：５名／ボランティアコーディネーター：２名

■ 学生コーディネーターの記録から

ボラカフェは「ボランティア・カフェ」の略語で、カフェのようなゆったりとした空間で、ボランティアの話が気軽に聞けるイベントである。実際にボランティア活動に参加した方やボランティアを募集している団体との交流を通して、参加者にボランティア活動を身近に感じてもらったり、ボランティア参加へのハードルを下げたりすることを目的に開催している。

今回は、国内外でワークキャンプを自主開催している「NPO法人good!」のスタッフとワークキャンプ参加経験者をお招きして開催した。国内ワークキャンプについては、実際に2022年夏の広島ワークキャンプに参加した学生（立教大学　２年）からお話を伺ったのだが、参加のきっかけは、『ボランティア論（全学共通カリキュラムの授業）』を受講したことで、ゲストスピーカーとして来てくださっていた「good!」の代表 磯田浩司さんの”偏見をなくす”という言葉が印象に残り、活動への参加を決めたとのこと。広島では、主に畑作業などの農業に取り組み、川遊びなども楽しんだと話していた。

海外でのワークキャンプについては、夏のモンゴルキャンプに参加した学生（武蔵大学 4年）からお話を伺った。実際に参加することを決断するまでは、迷いもあったそうで「海外に行く！」と考えな

がらも「言葉は通じるかな…」「お金もないし…」など、不安に感じる部分はたくさんあったとのこと。ただ、「今しか行けないかも！」という思いが強くなって参加を決めたと話していた。

国内・海外、それぞれのワークキャンプについてお聞きした後は、小人数のグループに分かれて感想などを共有した。参加者全員の前では聞きにくいこと、感想を聞き合うことでさらに疑問に感じたことなどが話題にあがったが、同じ話を聞いていても、一人ひとり感じ方は違っていて非常に興味深かった。

今回のイベント参加者からは、「実際にキャンプに参加した人と交流ができて楽しかった」「海外ボランティアの魅力を知ることができた」「新しいことに挑戦する背中を押してもらえた」などの感想をいただき、有意義な時間となったことを実感した。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲ボラカフェの様子

▲国内ワークキャンプについての説明

▲小グループでの交流

⑧ 2022年度 振り返りミーティング

実施日時	2023年２月21日（火）10：00～16：00
場　　所	池袋キャンパス ボランティアセンター
実施目的	(1)「学生コーディネーターMISSION2022」をもとに今年度の活動を振り返ることで、成果や課題を明らかにし、次年度の取組みにつなげること。 (2) メンバーそれぞれの考えや価値観、その時の感情を共有することで、各活動の効果・意義を多角的に振り返ること。
主な内容	(1) チェックイン (2) 2022年度の活動の振り返り (3) 活動報告会に向けた準備（方向性の確認、役割分担、スライド作成など） (4) チェックアウト (5) 学生Co企画（ボランティアセンター外装のアップデート）の作業
参 加 者	学生コーディネーター：４名／ボランティアコーディネーター：２名

■ 学生コーディネーターの記録から

「チェックイン」を通して、議論を進めるためのウォームアップを行い、今回の振り返りミーティングのゴールを共有。その後、今年度の活動を振り返るうえで、「学生コーディネーターMISSION2022」を改めて確認した。そのうえで、まずは今年度取り組んだことを「出来事」として書き出し、それぞれの取組みに対して「Keep（良かったこと・継続したいこと）」「Problem（結果的に良くなかったこと・改善点）」「Try（今後やってみたいこと・取り入れたいこと）」の３項目に関する考え・意見を付箋に書き出しながら共有した。

付箋に書いたそれぞれの考え・意見は、ホワイトボードに貼って共有しながら新たな意見を加えていったのだが、そこでは各項目に当てはまる「事実」を共有するだけではなく、「感情：そこでそれぞれが感じたこと」についても共有した。「応募するときにボラセンを初めて訪れて感じたこと」「面接時の職員の第一印象」「任命式で聞いたパイプオルガンの音色について」など、それぞれが当時感じていたことを赤裸々に書き込んでおり、普段のミーティングや活動時には見えてこなかった・気づかなかった他のメンバーの感情を可視化したことで、「あの頃はみんな同じことを思っていたんだな…」という共感ポイントや「あっ、そんなことを思っていたのか！」という新たな発見もあった。

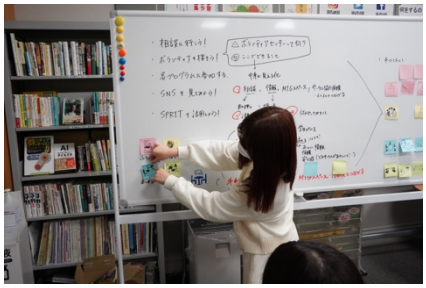
振り返りミーティングの最後には、「チェックアウト」として、それぞれの感想を共有する時間を設けた。多くのメンバーが「振り返ったことで新たに気付けたことも多かった」ということを話しており、長時間行っていたにも関わらず「あっという間に終わった」「楽しかった」という声もあがったほど、充実した時間になった。

振り返りを終えた後は、現在力を入れて取り組んでいる「ボランティアセンターの活動の見える化」を実現するため、池袋キャンパスのメンバーを中心に、センターの周りの装飾を検討した。「ボランティアセンターを訪れると何ができるのか」といった情報をひと目で分かるようなものにするため、「ピクトグラム」の案を作成。今後この案をもとに、デジタル化し、様々なところで活用していくことを予定している。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲KPTの手法を用いて考えを整理

▲付箋（考え）を加えていった


▲ピクトグラムの作成

2. バリアフリープロジェクト

実施目的	(1) 学生が、社会の中で人々を分断する「バリア」とは何かを考えながら、自由な発想と行動力を生かして、その解消を目指すこと。 (2) 新座キャンパス周辺地域に密着し、多様な人が参加できる企画とそれを楽しめる環境を創ること。 (3) 立教大学における新たな「バリアフリー」の取り組みのカタチを探ること。
募集期間	2022年６月22日（水）～７月20日（水）12：00
活動期間	2022年８月２日（火）～プロジェクトの終了まで ※2022年度中
定　　員	15名程度　→　14名の応募があり、そのまま全員が参加となった

■ 趣旨・背景

本学の新座キャンパスオープン時に、キャンパス周辺地域に受け入れてもらうため、福祉・心理・観光（学部）というヒューマンサービスの観点から地域密着型の活動を検討し、「バリアフリー映画上映会」を企画。大学として責任をもちながらも学生の自主性・主体性を大事にするため、「ボラセン主催・学生実行委員会実施」という実施体制を整備した。しかし、コロナ禍となった2020年度以降は実施形式をオンラインに変更。2021年度からは学生実行委員会を解体し、ボランティアセンターが運営を担う体制に変更していた。

2022年度は、これまでの実施内容や実施方法を見直した上で、発足時に期待されていた「学生による主体的な取り組み」という価値をより一層大きくするために、実施体制を「主催：学生実行委員会／協力：ボランティアセンター」とし、これまで前提となっていた「映画上映」という手段に限らず、多様な手段を選択することによってバリアの解消を目指せるような取組「バリアフリープロジェクト」として、再スタートさせた。

① 「キックオフミーティング①（全体）」の実施

実施日時	2022年８月２日（火）10：00～12：00
場　　所	新座キャンパス N322教室

実施目的	(1) 本プロジェクトの概要（歴史や経緯を含む）について理解を深めるとともに、プロジェクトの体制や進め方などのスタートラインを確認すること。 (2) メンバー一人ひとりの想いや考えを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属感を高めること（チームビルディング）。 (3) 解消したい「バリア」について具体的に考えることにより、プロジェクト全体のゴール設定や実施体制（グループ分け）の整備につなげること。
ゲ ス ト	(1) 青木　悠弥 さん （立教大学大学院 博士前期（修士）課程 1年／2019年度 バリアフリー映画上映会 学生実行委員長） (2) 渡部　恭史 さん （彩の国子ども・若者支援ネットワーク アスポート学習支援 指導員／2016年度 バリアフリー映画上映会 学生実行委員長）
参 加 者	学生実行委員会：14名　※欠席の2名については、9/2（金）にフォローアップを実施 ボランティアセンタースタッフ：３名

前身の「バリアフリー映画上映会」において学生実行委員長を務めた先輩学生と卒業生をお呼びし、「学生実行委員会として活動するということはどういうことか」について、それぞれのご経験をもとにお話しいただいた。学生実行委員会のメンバー内での交流機会が少なく、担当グループや学生・教職員の枠を越えた全体でのコミュニケーションがうまくいかなかったこと、それにより実行委員会内部で自分たちが“バリア”をつくってしまっていたことなど、当時直面した課題を取り上げながらお話しいただいたことで、今後の活動のイメージを掴むことができた。

その後は、「社会にはどんなバリアがあるの？」という問いに対して考えるグループワークを実施し、それぞれが感じる・考える“バリア”について共有した。「バリアフリープロジェクト」への参加を決めた理由やきっかけ、日常生活で感じる“バリア”にはそれぞれ違いがあるが、同じ社会課題を“バリア”だと捉えていても立場や視点が違うと見えてくる課題や改善したい方向性が異なってくる。だからこそ、このグールプワークでは、それぞれが日常生活で感じるバリアや関心・疑問をもっているバリアなどをそれぞれ書き出して、社会にはどんなバリアが存在しているのか、なぜそれがバリアだと感じているのかを共有するところから始めた。考えや価値観を共有した後は、それらを「①事物の（物理的な）バリア」「②制度のバリア」「③慣行（文化）のバリア」「④観念（心）のバリア」に分類しながら、どんな場面で問題が生じているのか、何がその解決・解消を妨げているのかなどを考えた。もちろんここで共有された全てのバリアに関してその理解を深めることはできなかったのだが、今後の活動に向けて、自分がこれまで気づいていなかったり、知らなかったりしたバリアについて、知ることができたと考える。

最後にプロジェクトを進めるうえでバリアの区分①～④をもとに、チームに分かれてプロジェクトを進めていくことを確認し、メンバーそれぞれがどのチームに所属するのかを決定した。

▲ゲストスピーカーのお話（渡部さん）

▲ゲストスピーカーのお話（青木さん）

▲グループワークの様子

② 企画・準備

■「キックオフミーティング②（チーム別）」の実施

実施日時	①2022年９月９日（金）10：00～12：00 ②2022年９月19日（月・祝）10：00～12：00
場　　所	いずれもオンライン（Zoomミーティング）

実施目的	・ 本プロジェクトの体制や進め方を確認し、学生の主体的な取組みとして自走できるようエンパワメントすること。 ・ メンバー一人ひとりの想いや考えを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属感を高めること（チームビルディング）。 ・ プロジェクト全体のゴール設定や実施体制（役割分担）をすること。
内　　容	(1) 活動に関する情報共有（MTGのもち方、記録データの管理、実施計画の立て方など） (2) 役割分担（リーダー・サブリーダーの決定） (3) テーマについてのアイディア出し
参 加 者	①「制度のバリア」「慣行のバリア」のメンバー：５名 ボランティアコーディネーター：１名 ②「事物のバリア」「観念のバリア」のメンバー：８名 ボランティアコーディネーター：２名

■ 全体ミーティングの実施

チーム別のミーティングを終えた10月から翌年１月まで、２週間に一回のペースで全体ミーティングを実施した。主に各チームのリーダー・副リーダーが参加し、各チームの進捗共有やチーム内での課題に対する意見交換、ボランティアセンターからの情報提供などを行った。

③ 各チームの取組み

(1)「事物の（物理的な）バリア」の解消を目指すチーム

所属：人工知能科学研究科 博士前期課程 ２年、社会学部 現代文化学科 ２年、観光学部 観光学科 ２年

同チームでは、テーマの軸になる事物の対象を「車いす」に設定し、車いす利用者とそれ以外の人が自然に繋がりやすい機会を提供したいと考えた。学内のバリアフリー状況を調べた際には、既存の「バリアフリーマップ」を片手に実際に学内を歩いてみることで、マップに記載されている情報であっても実際には完全なバリアフリーになっていない場合があり、自動ドア・エレベーターなどの設備に関する情報が完全には把握できていないことが分かった。そこで、学内の人であれば誰でも自由に使えるスペース（食堂など）へのアクセスや既存のバリフリーマップでは分からないような「快適度合い」「混雑度合い」などの点を更新した最新版のバリアフリーマップを作成しようと考えた。

さらに、車いす利用者や本学のしょうがい学生支援室のスタッフ等にヒアリングを通して、物理的なバリアフリー化を進めるだけでは根本的な改善には繋がらないこと、大学全体でバリアフリーに対する意識を高めていく必要があることを改めて感じたことから、「心のバリアフリー」を体現する上で重要な「しょうがいの社会モデル」という考え方を広めたいと考え、「バリアフルレストラン（車椅子ユーザーが多数派になった架空の反転社会を演出）」など、その普及啓発に取り組んでいる「公益財団法人 日本ケアフィット共育機構」のスタッフをゲストに招いたイベントを開催することにした。

(1)-1：広げよう、心のバリアフリー～「しょうがいの社会モデル」とは？～を開催

実施日時	2023年１月11日（水）17：30～19：10
場　　所	オンライン（Zoomミーティング）
実施目的	心のバリアフリーを実現するうえで欠かせない「しょうがいの社会モデル」という考え方について学び、社会にある様々な偏りについて共に考えること。
内　　容	(1)「しょうがいの社会モデル」に関する講演 (2) 質疑応答 (3) 2022年度バリアフリープロジェクトの活動紹介
講　　師	・ 佐藤　雄一郎 さん（公益社団法人 日本ケアフィット共育機構 経営企画室長） ・ 坂下　いずみ さん（公益社団法人 日本ケアフィット共育機構／本学卒業生）
対　　象	本学学生、立教セカンドステージ大学履修生、教職員
参 加 者	一般参加：10名（申込：4名） 企画メンバー：３名／ボランティアセンタースタッフ：５名

講師の坂下さんは、学生時代に「しょうがい学生支援室」のサポートスタッフ学生として活動した経験から、「“しょうがい”があることで難しいとされることは、本人に原因があるのではない。社会の環境を一度見直すことや手伝いの仕方などの少しの工夫次第で変えることができると実感した」そうで、現在はその経験を生かして業務に取り組んでいると話されていた。

また、佐藤さんからは、「車いすユーザーがマジョリティになった社会」を想定した動画の紹介を交えながら、「今の社会の偏り」や「合理的配慮」等についてお話しいただいた。特に、「当たり前」をひっくり返して考えてみること（例えば、全員が車いす利用者だったら？と考えること）によって、当たり前のように感じすぎて見落としていたものが見えてくるということ、さらに、「その人ができないのではなく、環境が“できなくさせている”のではないか？」と、常に考え行動することが大切であると話されていた。

最後に、本イベントを企画した学生メンバーが「バリアフリープロジェクト」を通して取り組んだ活動について紹介した。

▲オンライン配信中のメンバー

■ 参加者の感想（一部）

- 当たり前が何かということに日頃からよく注意を払う必要があると感じました。また、（しょうがいのある方に対して）「これができてすごいですね」といった発言には注意しなくてはならないと思いました。
- 今までは、しょうがいのある方に思いやりの心をもつべきだと考えていましたが、合理的配慮の話を聞いてそれだけではいけないと感じました。心の中で思うことは簡単ですが、実際に行動に移すことが重要だということを学び、自分の中の価値観を変えることができました。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(2)「制度のバリア」の解消を目指すチーム

所属：文学部 文学科（フランス文学専修）２年、現代心理学部 映像身体学科 ２年

同チームは、社会の「制度」によって生み出される障壁の解消を目指す中で、「色の見え方（色覚）」に着目した。そもそも人間がもつ「モノを見る」という機能は、「視力」「視野」「色覚」の三つに支えられており、「色覚」は色を識別する感覚のことをいう。他人と色の見え方・感じ方を比べることは簡単ではないため、自分の色覚特性が他と異なることに気づかない人も多いが、日常生活において標識やポスター、各種資料などから重要な情報を読み取る際に、色の違いを認識できないことで問題が生じる場合がある。

そこで、無料のスマートフォンアプリ「色のシミュレータ」を活用することで、参加者に自分と違う色の見え方（多様な色覚特性）を体験できるイベントを開催することにした。

(2)-１「ユニバーサルカラーについて学ぼう！」の開催

実施日時	①2022年12月16日（金）／②12月23日（金） ※時間はいずれも昼休み（12：30～13：20）
場　　所	①池袋キャンパス ５号館１階ロビー／②新座キャンパス １号館１階 ファミリーマート横
実施目的	(1) 体験型イベントを開催することで、色弱というバリアに関する認知度を高めること。 (2) アンケート調査を通してユニバーサルカラーに関する参加・体験者の声を集めることで、最終的に作成する「学内掲示物ガイドライン」に反映させること。

内　　容	(1)　スマートフォンアプリ「色のシミュレータ」を使用したゲーム体験 (2)　色覚多様性についての解説 (3)　色覚に関するアンケートの実施
対　　象	本学学生、教職員
参 加 者	① 一般参加：10名／運営メンバー：２名／ボランティアセンタースタッフ：１名 ② 一般参加：22名／運営メンバー：２名／ボランティアセンタースタッフ：３名

本イベントは、色覚に関するバリアへの関心が薄い人やそもそもその存在自体を知らない人をターゲットにし、申込みなどを必要とせずゲリラ的に開催した。

体験者は、まず袋の中から色のついたボールを2つ取り出し、その色を覚える。その後、VRゴーグルをセットし、「色のシミュレータ」を起動させたスマートフォン（自分とは異なる色の見え方）を通して、大量のカラーボールの中から、先程取り上げたボールと同色のボールを取り出す。実際に、色覚を「1型（P型）」「2型（D型）」「3型（T型）」などに設定して見ると、どのボールも同じ色に見えたり、先程見ていた色とは異なる色のボールが出現したりして、どれが指定色のボールなのかよく分からなくなるのだが、体験者は「この色は分かるけど、この色は勘で取るしかないな」「こんなに違って見えるのか」と驚きの声をあげていた。

最後に、自作の解説パネルを使いながら、なぜ特定の色が見えにくくなったのか、今回使用したアプリはどういうものかなどを体験者に説明し、「色覚の特性が社会のバリアになることもある」という現状を伝えた。

※スマートフォンアプリ「色のシミュレータ」について
「色のシミュレータ」は、様々な色覚特性を持つ人の色の見え方を体験するための色覚シミュレーションツールである。スマートデバイスの内蔵カメラまたは画像ファイルから得た画像をリアルタイムに変換し、それぞれの色覚タイプ（2色覚）ではどのように色が見えるのかのシミュレーションを行う。
（制作者である浅田一憲氏のWebサイト：https://asada.website/cvsimulator/j/index.html）

■ 体験者の感想（一部）

- こんなにも色が見分けづらくなるとは思いませんでした。今後ふとした瞬間に今日のことを思い出せそうです。貴重な体験をありがとうございました！
- ありがとうございます！ 楽しかったです！
- 昼休みの人通りが多い時間帯に開催されていて、よかったと思います。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲池袋の様子①

▲池袋の様子②

▲新座の様子

(3)「慣行（文化）のバリア」の解消を目指すチーム

所属：文学部 文学科（日本文学専修）２年、社会学部 現代文化学科 ２年、コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科 ２年

同チームは、情報の提供方法などによって生じる慣行のバリアに興味をもち、その解決に向けて議論を重ねてきた。特に、大学内の標識や貼り紙の多くは日本人向けのため、「英語表記がない」「そこで使われている日本語の文法や単語などが難しすぎる」等の現状に注目し、「日本で暮らす外国人が感じていると思われるバリア」の解消のため、「やさしい日本語」の取組みに着目した。

「やさしい日本語」とは、通常の日本語よりも簡単な表現・表記をすることで、外国人にもわかりやすくした日本語のことである。外国人への情報提供手段としてはもちろんのこと、子ども、高齢者、しょうがいのある人などとのコミュニケーションにも効果的なツールとして、社会全体に普及していくことが望まれている。

まずは、多文化共生社会づくりに関する事業として、実際に「やさしい日本語」の普及・啓発に取り組んでいる「一般財団法人 東京都つながり創生財団」のスタッフや本学日本語教育センター長の池田伸子先生にヒアリングをさせていただき、やさしい日本語を取り巻く現状やそこでの課題などについてお聞きした。

■「一般財団法人 東京都つながり創生財団」へのヒアリングの実施

実施日時	2022年11月14日（月）15：30～
場　　所	オンライン（Zoomミーティング）
実施目的	ヒアリングを通して「やさしい日本語」に関する具体的な疑問の解消とともに、検討中の普及活動における課題点や改善点を改めて認識することで、今後の活動指針とすること。
ヒアリング内容	・ やさしい日本語を全く知らない人が使用する際に一番意識すべき点は何か？ ・ やさしい日本語を特に広めたい年代・立場はあるか？ ・ やさしい日本語を普及するために具体的にどんな取り組みをしているか？ ・ やさしい日本語を使える日本人を増やすためにどうしたら良いか？ ・ ポータルサイトに掲載されているツールは実際にどのような場面で使うのか？ ・ 現在やさしい日本語を普及する取り組みを行っているなかで、最も課題に感じる点は？ ・ 大学生がやさしい日本語を学ぶ取り組みに期待することは何か？ ・ 大学生が実際にどのような場面でやさしい日本語を使うことが想定されるか？
参 加 者	東京つながり創生財団のスタッフ：３名 チームメンバー：３名／ボランティアコーディネーター：２名

■「池田伸子先生（日本語教育センター）へのヒアリング」の実施

実施日時	2022年11月11日（金）16：00～16：30
場　　所	オンライン（Zoomミーティング）
実施目的	ヒアリングを通して「やさしい日本語」に関する具体的な疑問の解消とともに、検討中の普及活動における課題点や改善点を改めて認識することで、今後の活動指針とすること。
ヒアリング内容	・ やさしい日本語を知らない人が使うとき意識すべき点 ・ やさしい日本語を使える日本人を増やすために必要なこと ・ 教育に対して期待すること ・ 多言語と複言語の違い ・ 大学生がやさしい日本語を使う場面 ・ 他の言語で書かれている場合でもやさしい日本語を用意する必要があるのか
参 加 者	池田伸子先生／チームメンバー：３名

上記のように、「やさしい日本語」についてのヒアリングを実施したうえで、実際に「やさしい日本語」を普及できるように、体験ワークショップを開催した。

■ 体験ワークショップ「やさしい日本語を使ってみよう！」の開催

実施日時	2023年１月14日（土）13：00～14：30
場　　所	池袋キャンパス 6401教室

実施目的	多くの人に平等に情報が伝わるように、「やさしい日本語」を普及すること。
内　　容	(1) 「やさしい日本語」とは何か (2) 「やさしい日本語」にする方法（グループワーク）
対　　象	本学学生
参 加 者	一般参加：５名（申込：５名） チームメンバー：３名／ボランティアコーディネーター：１名

本学では「多文化共生社会と日本―やさしい日本語」という科目を開講しているが、今回のイベントにはその履修生も参加していた。

冒頭部分では、「やさしい日本語」について知っていただくために、チームメンバーがこのプロジェクトを通じて調べたこと、「東京都つながり創生財団」の方々や「立教大学日本語教育センター」の先生へのヒアリング等を通じて学んだ「やさしい日本語」とその現状、普及活動をしている方々の取組みについて紹介した。２回のヒアリングでは、ともに「やさしい日本語を使う時に一番意識すべきこと」をお聞きしたが、共通して「伝えようとする気持ち」「一番伝えなければならないことを意識すること」が大事であるという回答を得た。それらについても参加者に伝えた。

また、「やさしい日本語」は外国の方に対してだけでなく、しょうがいのある人や高齢者にも、伝わりやすいという特徴がある。「やさしい日本語」にするコツは「はっきり／さいごまで／みじかく」であるが、大学内の標識や貼り紙を留学生などの外国人にも分かりやすい「やさしい日本語」で表すという簡単なワークを行うことで、それらを実践する時間を設けた。

さらに、「やさしい日本語」を用いた会話や小説を読むワークを行った。各グループでは、「敬語で伝えようと思い過ぎると難しい。本当は単語だけの方が伝わったりするのかも」「今伝えたい情報の中で、一番大事なことって何だろう？それを伝えるにはどうしようか？」など、様々な意見や感想が飛び交っていた。大学構内の標識もまだまだ日本人向けのものが多く、外国人には理解しづらい状況であるが、「やさしい日本語」が普及することで、情報の提供方法（伝え方）などから生じるバリア（障壁）が少しでも解消され、キャンパスで学ぶ多くの留学生にとっても過ごしやすくなり、学生同士の交流が活発化していくと良いと思う。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

▲イベントの様子

▲キャンパス内の標識についての説明

▲ワークの様子

(4) 「観念のバリア」の解消を目指すチーム

所属：文学部 キリスト教学科 ２年、文学部 史学科 ３年、文学部 文学科（英米文学専修）３年、社会学部 現代文化学科 ３年、観光学部 交流文化学科 ３年、コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科 ２年

「観念のバリア」をテーマにした同チームは、日常生活で自分たちが感じるバリアを共有することから考えを深めた。そこで着目したのが、「机と椅子が整然と並べられた各教室で椅子に座ったまま学習するという習慣・日常」である。もちろん大学の各教室は、多くの学生が快適に学習できるようにデザインされているのだが、学習場面によってはグループワークなどの協働学習を実施しづらいこともある。さらに、大半の学生が快適に利用できていたとしても、身体的・個人的（特に少数派）な特

性と机や椅子など設備が合わないことで、疲労や痛みが生じたりすることもあるのではないかということについても想像を巡らせた。

昨今は、コロナ禍の影響に後押しされる形で、社会的にリモートワークが普及・定着、それと同時に「作業姿勢」の改善・見直しにも注目が集まり、環境の改善によって集中力をあげたり、ストレスを軽減したりすることの重要性は社会的にも認められてきている。そこで、「観念のバリア」チームでは、本学の学習環境においてストレスフリーな状況を整備することを目指し、そこで使用されている備品やその配置などに変化を加えることへの挑戦をスタートさせた。

■ 検証方針の設定に関する試行錯誤

当初は、学内外でWebフォームを用いたアンケート調査を実施し、これまでの学習の場での経験（小学校～大学）を聞くことで、それぞれが“良い”と感じた学習環境を把握しようとしたのだが、準備を進めていくうちに、「従来の学校で“良い”とされる学習環境には、机や椅子などの備品だけでなく様々な要因が絡んでいることから、具体的に何が学習効果に対して良い影響を及ぼしているのかを特定することができないのではないか」という疑問が生まれた。ここでWebアンケートでの調査の限界を知ったことにより、調査の場をオンラインから実際の現場へと変更することにした。

元々自分たちが日常的に使用している学内の学習環境から、解消したいバリアを設定していたことに立ち返り、学内のスペースを使用することで、その空間の備品に変化を加えた実証実験を行うことができないかと考えた。その後、実際にキャンパスを歩き、検証スペースの候補を絞った。

自分たちの目的や検証イメージ、そして目指すものを落とし込んだ企画書を完成させた後は、ボランティアセンターを通し、候補となった施設を管轄する担当部署に打診して、検証実施に関する提案の場をいただいた。ここでの提案を経て実現したのが、池袋キャンパスにある「メーザー・ラーニング・コモンズ」での検証である。

■ 池袋キャンパスでの検証

既存の学習空間から生じる物理的・精神的バリアに注目し、「椅子や机などの配置を固定している学習環境が、グループワークの活発な対話を妨げているのでは？」という疑問から、そのバリアを解消するための検証を以下の通り、企画・実施した。

（4）-１：「配置自由な学習スペース」の実施

実施期間	2022年12月12日（月）～16日（金）
場　　所	池袋キャンパス メーザーライブラリー記念館２階 メーザー・ラーニング・コモンズ
実施目的	(1) 試験的に既存の椅子に多様な選択肢を設けた学習環境を整備したうえで、そこで学習者におこる変化を検証し、ストレスフリーとなる要因を把握する。 (2) 検証結果を踏まえた提案を行い、2023年度建設予定の新座キャンパス新棟の室内計画にストレスフリーな学習環境を組み込む。
実施内容	・ 可動式の机や椅子、ホワイトボード、バランスボール、座布団等の貸し出し ・ 利用者に対するヒアリング
利 用 者	25名

「配置自由の学習スペースで、備品を利用した学生がどのようなメリットを感じたか」「複数人での学習の際に意見が共有しやすいかどうか」などを利用者に直接ヒアリングした際には、学生全員からの「また使いたい」という意見に加えて、「雑談をする時と学習する時は理想としている距離感が違い、配置を自由にできることはメリットがある」「効率的な作業につながる」「バランスボールや座布団は休めるものとして良い。長時間学習するときにメリハリがつく」などの声が挙がった。

▲検証スペースでのヒアリング

今後、本学の学習空間を再検討する際には、今回の検証で確認した「ディスカッションなどを含めた協働学習の場における既存の形式にとどまらない備品の導入」や「視線が一方向に集中しない配置」

などが、貴重な声となるだろう。検証結果（利用者アンケートとヒアリングの分析結果）をまとめ、学内の新たな学習環境への提案（学生の声）として、今後学内の施設を管理する部署に届けていく。

■ 新座キャンパスでの検証

新座キャンパス担当の学生は、「個別学習時」を想定し、「１．身体的な特徴・個人の特性の差異から生じるストレス（身体のサイズや骨格などはそれぞれ差異があるため、机や椅子を使用することで痛みや精神的苦痛が発生する場合もある。既存の机や椅子が想定する身体モデルと異なる状況に置かれている学生に対しての支援が必要なのではないか）」「２．机や椅子の固定的な配置による学習者の活動の制限（学習姿勢の制限・固定化は、エコノミークラス症候群に代表されるような悪影響を身体に及ぼす。長時間の連続的な学習において、学習者の姿勢の変化がないことは学習効果や集中力の低下を招く一つの要因なのではないか）」の２点が課題として生じているのではないかと考えた。

これらを改善するために企画の軸としたのが、「①既存の学習環境において、学習者が自身の特性に合わせて使用備品を“選択できる”ようにすること」「②長時間の連続的な学習を想定し、学習姿勢を制限・固定化させないような備品（椅子）を設置すること」である。

こうした環境を実現させるために、「新座図書館２階しおり（ラーニング・コモンズ）」を利用する学生に対し「バランススツール」「バランスボール」「クッション」を貸し出すことはできないか、という提案を新座図書館のスタッフの方にさせていただき、新座図書館のスタッフ全体で協議していただいたうえで、検証実施の協力を得ることができた。

(４)-２ 新座図書館「ストレスフリーな学習環境の検証」の実施

実施期間	2023年１月17日（火）～24日（火）
場　　所	新座キャンパス図書館 ２階しおり（ラーニング・コモンズ）
実施目的	(1) 試験的に既存の椅子に多様な選択肢を設けた学習環境を整備したうえで、そこで学習者におこる変化を検証し、ストレスとなる要因を把握する。 (2) 検証結果を踏まえた提案を行い、2023年度建設開始予定の新座キャンパス新棟をはじめとする学内スペースにストレスフリーな学習環境を組み込む。
実施内容	・ バランススツール、バランスボール、クッションの貸し出し ・ 利用者アンケートの実施
利 用 者	29名

検証期間中は学生が毎日検証場所を訪れ、備品のメンテナンスを行った。検証初期は貸し出しを実施していることの認識が広まらなかったため、ポスターを貼る場所を増やすなどして広報を強化した。

また、検証終了後に、貸し出し手続きをしてくださったスタッフの方などに利用学生の様子をお聞きしたところ、効果を実感してリピーターになっていた方や新座図書館１階に運んでまで利用してくださった方がいたとのこと。さらに、検証が終わってからも「備品を借りたい」という声があったそうで、想像以上にニーズがあったことを実感した。

利用者に協力をお願いしたアンケートには、備品を借りた理由や実際に使ってみた効果などを身体の部位別に記入できるようにしていたため、詳細なデータを得ることができた。

実際にデータを整理・分析してみたところ、「備品を選んだ理由」としては「身体疲労の軽減」「身体の痛みの軽減」と回答した人を合わせると39％にものぼった。もちろん各教室や施設は、多くの学生が快適に利用できるようにデザインされているわけだが、あくまでも多数者に適したデザインであり、そこに含まれない少数者にとっては、自身の身体的な特性との相性が悪く、それ故にむしろ疲労や痛みを生じさせてしまうバリア（障壁）になっていたことが分かった。

▲実際に貸し出した備品

一方で、今回の検証では備品を利用した目的の２番目に「環境の変化」が挙がった。この備品選択は、「身体への疲労・痛み」

を感じている少数者のみならず、“精神的な効果”を求める人にも良い影響を及ぼしていたのである。

「ラーニング・コモンズに限らず、既存の椅子を変えられる選択性があった方が良いと思うか」の設問に対しては、９割以上の学生が「はい」と答えており、学習環境における椅子などの備品についてその「選択性」を実現することが、身体的ストレスを感じている少数者を含めた多くの人にとってよりストレスフリーになるのではないか、学生が求めている学習環境となるのではないかと考えている。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

④ 振り返りミーティング（事後学習）の実施

実施日時	2023年３月21日（火）13：00～16：00
場　　所	新座キャンパス N842教室
実施目的	(1) 各チームの取組みについて、その効果・意義を多角的に振り返ること。 (2) 活動を通して得た気づきや経験を踏まえて、解消を目指した「社会的バリア（障壁）」への理解を深めること。 (3) 他者の視点を取り入れながら自分の変化を確認することを通して、「社会」の中に自分を位置づける（当事者性を育む）こと。
ゲ ス ト	(1) 青木　悠弥 さん （立教大学大学院 博士前期（修士）課程 １年／2019年度 バリアフリー映画上映会 学生実行委員長） (2) 渡部　恭史 さん （彩の国子ども・若者支援ネットワーク アスポート学習支援 指導員／2016年度バリアフリー映画上映会 学生実行委員長）
参 加 者	学生実行委員会：９名　※欠席者の内２名については、後日フォローアップを実施 ボランティアセンタースタッフ：４名

■「ココロ（キモチ）」の振り返り

初めに自分の「ココロ（キモチ）」に向き合う時間を設け、”最も感情が動いた場面”を共有しながら、それぞれの感情の揺らぎや気持ちの変化を振り返った。

まずは個人で振り返り、”最も感情が動いた場面”をワークシートに書き出した後に、活動してきたチームに関係なくごちゃまぜにした小グループでその場面を共有した。語り手に対して、聞き手は質問しながらそのときのキモチを深掘りしていくのだが、チームは違えど活動を通して感じていた感情に共通点が多く存在していたようだった。

全体で共有した際には、「ボラセン以外の部署と連携する時にボラセンとうまく意思疎通できなかった」「制度のバリアの解消を目指したが、法律を変えなければならないなどの問題は、学生の力ではどうにもできないように感じた」「既存の考え方（概念）を変えるために取り組んできたが、相手が当たり前のように感じていることを変えるのは簡単ではなく、すぐには受け止めてもらえなかった（人の考え方を変えるのは難しい）」などの「ネガティブな感情を抱いた場面」が先に挙がった。特に、「自分たちの思い通りに進まなかった場面」で困難を感じたり、悩んだりしたようで、コミュニケーションの問題や自分たちにできること・学生の力が小さく感じたことなどが、結果的にネガティブな感情へとつながっていたようだった。

一方で、「自分たちの取組みに対して、参加者からの反応があったことが嬉しかった」「イベント開催時に、参加者同士で学び合う様子があったり、自分たちが参加者に教えてもらったことがあったりした」「学生だけだとできなかったかもしれないが、大学の職員など、様々な人の協力のおかげで実現できた」といった「ポジティブな感情を抱いた場面」も共有された。

ここで印象的だったのが、スキルの向上や達成感のような自分の変化よりも「他者との接点」においてポジティブな感情を得ていたということである。チームによって違いはあるものの、学外の組織

にヒアリングをしたり、学内の関連部署に提案したり、実際にイベントを開催して参加者と接したりするなど、多様な人を巻き込みながら様々な反応をいただいてきた。学生の多くは、そこで「何かがうまくいく」「高い評価をいただく」ということではなく、そのような機会・時間を創ることができたこと自体に喜びを感じていたようだった。

また、「ネガティブな感情を抱いた場面」で「やめてしまおうか」と考えたことも共有されたのだが、そこで「続ける」という選択をしたことで、結果的に上記のようなポジティブな感情を得ていたことも分かった。迷いや悩み、困難を乗り越えた先で得たこれらのポジティブな感情が、「楽しい」という一時的な感情の変化ではなく、「学びになったということの喜び」として語られていたことも印象的で、プロジェクトを通してより深い体験をすることができたことを示していた。

■「アタマの振り返り」

続いて実施した「アタマの振り返り」では、活動してきたチームごとに、自分たちが取り組んだ活動の効果・意義を多角的に振り返った。まずは、解消を目指してきた「社会的バリア（障壁）」をチームごとに確認し、そのうえで自分たちの取組みによって生み出したと考えられる「効果・意義」を付箋にできるだけたくさん書き出した。その後、個人で書き出した効果・意義のアイディアをチームで共有し、それらを模造紙に書き込んだ４つの枠、「①ボランティア自身」「②課題の当事者・活動の対象」「③活動する組織」「④地域・社会」に分類・配置していった。元々、社会的なバリア（障壁）を解消することで、その当事者を含む多くの人の役に立つことを志していた学生が多かったが、今回の振り返りの様子を見ていると、「①ボランティア自身」に関する効果・意義が非常に多く共有されていた。ボランティア自身、つまり自分たちにとっての良い影響が様々な場面で生まれたことで、「誰かのために取り組んだことが、結果的に自分のためにもなっていた」ということを改めて認識した。

プロジェクトを通して見えた良い影響（効果・意義）もあれば、社会課題に対して近づき、深く知ったことで新たに気づくことができた「課題」「バリア（障壁）が解消されない要因」などもあった。これらについても、チーム内で意見交換しながら共有することで、社会的なバリア（障壁）を生み出している社会の構造についての理解をより深めることができた。

「アタマの振り返り」の最後に行った各チームの発表の内容を簡単に紹介する。

▼「制度のバリア」チームの発表

「ユニバーサルカラー」「色弱」をテーマに活動し、それらを体験できるようなイベントを学内でゲリラ的に実施した。そのイベントを通して分かったことは、参加者に「当事者が身近にいるということやその問題自体を知ってもらうこと」はできても、色覚というそもそも一人ひとりに差がある身体のことであるため「実感してもらうこと」まで働きかけるのには限界があるということである。一人ひとりの感覚が違う（他者の感覚を認識できない）というところが、この「社会的バリア（障壁）」を生み出している要因だということが分かった。

当事者のことを理解することは難しいからこそ、「当事者に寄り添う」「そもそも当事者にも個人差があるということ」を当たり前のように認識できるようにすることが大事だと思っている。

▼「慣行のバリア」チームの発表

主に外国人などに対して使用する「やさしい日本語」をテーマにしたワークショップを開催した。その中で、意図せず留学生が参加してくれたことから新たな視点が得られたり、学習者同士で交流が生まれたりするなどの効果があった。

一方で、今回のワークで効果・意義を分類した際に「地域・社会」の枠に配置できる付箋があまりなかったことから、その理由を考えたところ、今回のワークショップを学内・大学生限定で実施したことで、その効果が学外にまで及ぶような動きにはならなかったという課題が見えた。

今後は学外の団体や日本語学校の学生など、参加者の募集範囲を広げることで、より良いイベントにしていければと思っている。

▼「観念のバリア」チームの発表

学習時における環境の考え方を変えることを目標に活動してきた。池袋キャンパスでは、グループワークの場を中心に精神的なバリアを解消することやコミュニケーションを活発化させることを、新座キャンパスでは、学習姿勢や身体的なバリアの改善・解消を、それぞれ目指して検証を行った。

「課題の当事者・活動の対象」に分類した付箋には、「椅子の自由配置や椅子自体をフワフワしたものに変えることで学習効果が上がった」というものもあったが、車椅子の方などにとっては効果のある働きかけではなかったので、「全ての人を対象にすることができなかった」という課題もあった。

今回のような検証の事例がそもそも少ないため、その事例を他大学や地域に伝えていくことも大事であると思う。さらに、学外に出て地域のどこかで自由に備品の配置を変えてみる・よりリラックスできるものに変えてみるということに挑戦してみるのも良いのではないかと思った。

■ 最後の問い・・・「バリアフリーな社会」って何？

最後は、「あなたはバリアフリーな社会の中に、自分をどのように位置づけますか？」という問いに対して、それぞれが自分の言葉で語る時間を設けた。最終的に参加学生は「バリアフリーな社会とは何か？」「それを実現させるため、自分にはどんな関わりができるのか？」「なぜそう考えたのか？」などを全員の前で話した。学生がワークシートに書き込んだ内容の一部をいくつか紹介する。

・「やさしい日本語」はよく知らなかったけれど、私が日本語に困らないから意識していなかっただけで、身の回りの言語表示には多くのバリアがあると感じた。特に大学内では、留学生と関わる機会もあるし、今もこれからもやさしい日本語はもっと広まるべき。なかなか広めるのが難しかったから、多くの立教生にも身近で役に立つと知ってもらいたいなと思う。
「バリアフリーな社会」⇒これまで私が意識せず過ごせていたように、日本に住む外国人、または高齢者、子ども、しょうがいのある方など、いろんな属性の人が何も感じずに過ごせるようになること？　（「慣行のバリア」チームのメンバー）

・サークル活動を通して、しょうがいのある人と関わる機会があり、その際に生活の不自由さを考えたことからバリアフリーに興味をもった。しかし、今回のプロジェクトを通して、バリアというものが自分の身近にあることを実感した。何なら自分にもバリアだと感じていることがあった。バリアは私にとって自分を含めすぐ身近にあるものだと感じた。
バリアフリーな社会＝自分でつくり出せる！　（「観念のバリア」チームのメンバー）

・まずもっと勉強したいと思った。学科の授業の中で、自分自身が（個人の特性に）グラデーションをもっていて良いのだと少し心が落ち着いたことがあった。バリアに関しても同じだと思った。カテゴライズはわかりやすいけれど、個々人にスポットが当たらない難しさがある。だから実際に学んで当事者のコミュニティに入ってその世界を知ろうとすることが大切だと思った。（今回の活動で取り上げた課題の）認知度を高める活動をしてみたい。また、社会（マジョリティ）とのズレを自分の作品に昇華していきたい。様々な人が意見を出しやすい社会になってほしい。
（「制度のバリア」チームのメンバー）

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。